

5 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2009 in Higashimikawa

「技」分科会では、「県境域の持続的発展に向けた産学官連携・農商工連携への期待」をテーマに、三遠南信バイタライゼーション協議会の活動など重点プロジェクトに沿った報告が行われた。

その後の意見交換では、地域資源の発掘活用、異業種間の情報交換、キャッチコピー等による情報発信、既存の産学官連携事業の三遠南信地域全体への拡大、連携から融合への転換について、その重要性、必要性が確認された。

コーディネーター	愛知大学	三遠南信地域連携センター長(経済学部教授)	岩崎 正弥
アドバイザー	株式会社サイエンス・クリエイト	代表取締役専務	中野 和久
行政	浜松市	市長	鈴木 康友
	蒲郡市	副市長	足立 守弘
	豊根村	村長	熊谷 卓也
	松川町	副町長	松下 義明
経済	袋井商工会議所	会頭	高橋 芳康
	豊川商工会議所	副会頭	日比 嘉男
	小坂井町商工会	会長	丸山 登三雄
	田原市商工会	会長	山田 俊郎
	渥美商工会	会長	渡会 一昭
	阿智村商工会	会長	片桐 美治
	三遠南信バイタライゼーション協議会	会長	柴田 義文
住民	特定非営利活動法人佐奈川の会	会長	近藤 健治
	祭り街道の会	会長	池田 弘志

(敬称略)

■ 第16回三遠南信サミット2009 in 遠州における「技」分科会の議論について



コーディネーター

今回の「技」分科会のテーマは、「県境域の持続的発展に向けた産学官連携、農商工連携への期待」である。今日は、三遠南信地域連携ビジョンの政策の基本方針「技」の4つの重点プロジェクトを中心に議論を進めてまいりたい。時間があれば、フロアーの皆様方からのご意見、ご質問等々を受け付けたいと思う。

まず、「技」の重点プロジェクトの3つ目、「特徴ある産業クラスター拠点づくりと県境を越えた事業連携」に関連して、三遠南信バイタライゼーション協議会会長の柴田義文様より、三遠

南信バイタライゼーション協議会の活動について、ご報告をいただきたい。

■ 三遠南信バイタライゼーション協議会の活動について

三遠南信バイタライゼーション協議会会長

三遠南信バイタライゼーションについてご説明申し上げます。

産業クラスター計画は、経済産業省から承認された事業で、平成14年から始まり、5年間で1期として、現在2期目に入っている。産業クラスターとしては初めて浜松、飯田、東三河というような県を跨ぐ地域に指定されたものである。

3地域に支部をつくり、連携を保って基盤技術の高度化や次世代産業の創出にそれぞれ取り組んでいる。浜松を中心としたオプトロニクスクラスターの中には、知的クラスター創成事業、産業クラスター計画、地域結集型共同研究事業がある。

地域中核産学官連携拠点光電子技術イノベーション創出拠点という事業が今年の7月12日に地域指定された。浜松医科大学、静岡大学のほか、第2期から豊橋技術科学大学も参加している知的クラスター創成事業では、イメージング技術という光を受ける技術に取り組んでおり、浜松ホトニクスが主体となった地域結集型協働研究事業では光を出す技術に取り組んでいる。こういうもので静岡大学、浜松医科大学、豊橋技術科学大学、光産業創成大学院大学が連携し、新しい産学官連携拠点を創出しようとしており、既に製品化されているものもある。それぞれの大学の特徴ある技術で、医工連携、農商工連携等をし、輸送用関連次世代技術、健康医療関連産業、光エネルギー産業、新農業に取り組んでいる。

浜松支部の取り組みを申し上げますと、大学と一緒にあって、オプトロニクスクラスターを推進しており、文部科学省、経済産業省等関係省庁に支援していただいている。

浜松支部は、産業クラスターとして浜松商工会議所が中心になっており、様々なグループ、

団体の協力を得ながら新産業創出事業等の事業を推進している。最終的には浜松は関東経産局、豊橋は中部経産局の指導を受けている。これをまた3地域へ拡大しようと考えている。

浜松支部には、宇宙航空研究会、医工連携研究会、農工研究会、光関連技術研究会、輸送用機器研究会があり、浜松地域の各企業の方に参加していただいている。新連携等支援地域戦略会議は、中小企業基盤整備機構が受けたもので、何社かが組んで新製品を開発している。浜松の場合はプロジェクトマネージャーを置いて、この方の指導で現在20数件の事業を推進して、製品化を行い、売り上げも上がりだしている。

農商工連携では、浜松の場合は、勉強会や視察会を開催し、製造業等の方の知識を吸収し取り組んでいる。

■ ビジネスマッチングの促進について コーディネーター

重点プロジェクトの1番目ビジネスマッチングの促進については、東三河地域ではどのような状況かご説明いただきたい。

豊川商工会議所副会頭

この地域にある、飯田、浜松、磐田、掛川、遠州、豊橋、蒲郡と私ども豊川の8つの信用金庫で、昨年、浜松において第1回の三遠南信しんきんサミットを開催し、それぞれの地区の特産物をご紹介いただいた。今年は、10月6日、このホテル日航豊橋で、農商工連携をテーマに開催させていただいた。82社に出店していただき、そこで試食、試飲、一部販売をして広く商品をPRしていただいた。私どもは、それぞれの地域の特産物を県境を越えて相互に紹介し、新しい商品の開発や販路拡大につなげていただきたいと願っている。当日は3,000名の方にご来場いただき、商談も個々に行われていたようである。

豊川信用金庫も単独で毎年「かわしんビジネス交流会」を開催し、互いの技術あるいは産物等を紹介していただいている。今年は豊川市総合体育館で開催したが、142社に参加していただ

き、2日間で約5,000人の方にお越しいただいた。

地元と関係の深い信用金庫がいろいろな意味でお手伝いできればと前向きに取り組んでいるところである。

■ 国内外に向けた人材・企業誘致の活動促進について

コーディネーター

続いて、重点プロジェクトの2つ目、国内外に向けた人材・企業誘致の活動促進に関して蒲郡の副市長の足立様からご報告をいただきたい。

蒲郡市副市長

海外に様々な日本の企業を移すという話が多くある中で、東三河地域に国外の企業を誘致してくるというのは、大変難しい話である。一般的に人材を確保するということになる、海外の労働力を使おうという時代があったが、それは一つの区切りをつけて終わっている。必要なのは、ビジネスマンや先生方、研究者、そういうプロフェッショナルの方とのネットワークを形成し、共通課題を解決していくことである。三遠南信地域に必ずしも来る必要はない。生身の人間や企業がここに来るとすることも大事であるが、それに加えインターネットの利用を考えていく必要がある。

外国企業の誘致ということであれば、三河港の中に外国の自動車の会社の誘致や、ジュース会社の誘致をやってきたが、規制が足かせになる場合があり、もっと自由な動き方ができるような環境づくりが必要ではないかと考えている。

■ 産業クラスター（光電子技術イノベーション創出拠点事業）について

コーディネーター

続いて、先ほど柴田様からこの3番目の重点プロジェクトに関して報告をいただいたが、改めてこの産業クラスターに関連して、今度は浜松市長の鈴木様から、光電子技術イノベーション創出拠点事業についてご報告をいただきたい。

浜松市長

先ほど柴田さんからわかりやすくご説明をいただいたので、私からはクラスターの背景等について補足説明をさせていただく。産学官連携というのは、歴史的には古くからあり、全国的には成功したところ、失敗したところいろいろある中で、この地域は産学官連携が比較的うまく進行した地域である。文部科学省の知的クラスター、あるいは経済産業省の産業クラスターの認定をいただき、幾重にも国の支援を受けながら産学官連携を進めてきた。

かつては、文部科学省と経済産業省がそれぞれ同様のクラスター計画を別個に進めていた。国会議員だった私は、経済産業委員会として、非効率であり統合した方が良くと申し上げたが、ここに来てそのような動きになっている。

そして、今度の文部科学省と経済産業省が合同で行う新たな産学官連携の拠点づくりは、限られた資金の中、投資効果のないところには支援をしないというものである。いわゆる地域中核産学官連携拠点と、もう一つ、スケールの大きいグローバル連携拠点の2つに分けて、産学官の連携拠点を集約し、認定を受けたところに集中的に国が支援をするという枠組みとなった。

よって、今回の国の認定を受けられないと、今後国の支援というものが薄くなってしまう。私どもとしてはなんとしても認定を受けるべく、浜松地域と東三河地域合同で光電子技術イノベーション創出拠点という形で、この産学官の地域連携拠点に応募をした。

この地域における産学官連携のこれまでの実績や、今回応募した新たなクラスター形成の計画が非常に高く評価され、国の認定を受けることができた。これで、今後10年間にわたって集中的に国から様々な支援をいただき、持続的にイノベーションを創出ができることになる。これを利用して、光電子技術により新産業の創造や既存産業の高度化に取り組んでいるところである。

私どもとしては、今は浜松地域と東三河地域合同でやっているが、これを是非三遠南信地域

全体に広げていきたい。飯田市を中心とする南信州は、産業的に非常に様々な資源をお持ちのところである。是非南信州も含めてこうした取り組みをしていきたい。

そういう意味で、この三遠南信地域というのは非常に可能性の高い地域である。みんなでタッグを組んでこうした取り組みをしっかりとやっていきたい。

■ 大学フォーラムの設置について

コーディネーター

それでは、重点プロジェクトの4番目、大学フォーラムの設置に関して、私から報告をさせていただきます。

私は現在、愛知大学三遠南信地域連携センターにいるが、三遠南信地域大学フォーラムの設置に関して、三遠南信の各大学の学長会議や学生の単位互換といった相互協力は、残念ながらほとんど進展していない。

先ほど全体会の中で豊橋技術科学大学の大貝先生より報告があったが、愛知大学と豊橋技術科学大学の間で、三遠南信のエコ地域づくり戦略プロジェクト研究会という連携融合事業がスタートしている。これは来年、5年目の取りまとめの年になる。そういう形でのプロジェクトは若干動き始めている。

それから、愛知大学三遠南信地域連携センター単独の活動としては、三遠南信をテーマとする一般市民向けのコミュニティカレッジを積極的に開催してきた。今年は「食」をテーマに三遠南信の食と農を取り上げた。

また、国や県と共催で豊川流域大学や豊川流域圏講座というコミュニティカレッジを開催した。その卒業生たちが、いわば越境プレイヤーとして、自ら地域づくり活動を始めている。

しかしながら、結論的には、この重点プロジェクトの4は、まだ進展しない状況にあるといえる。

補足説明として4つの重点プロジェクトを私も含めて4名の方にご報告いただいた。今日、私の隣におられる中野さんは、アドバイザーとして昨年もこの「技」の分科会のアドバイザーを

務めていただいた。この1年間でどういう進捗状況にあったのかということを経済的にコメントしていただきたい。

アドバイザー

農商工連携は、昨年4月から農林水産省及び経済産業省と一緒に始めてのものであり、東三河では3つの認定を受けた。

もう一つ、今年の1月から2月の初めにかけて、アンテナショップとして浜松と東京で約40社、山間部の商品を中心に約40品目集めて、2日間ずつ販売した。浜松では、東三河と浜松の山間部の商品に比べ、南信州の商品が圧倒的に売れた。東京の下町、大山の商店街では、売り上げは多かったが、東三河、遠州、南信州について100人の客のうち1人か2人しか知らない状況であった。この地域を売るには、徳川家康や武田信玄など、なるべくこの地域をイメージさせる人をPRした方がよいのではないかとというのが、私の印象である。

もともと山間部の商品の売り方が議題になっていたのも、アンテナショップを開催したのは大きな進歩ではないかと思う。

■ ショルダーコピーについて

コーディネーター

質問があれば会場からも伺いたい。

豊橋市議会 伊藤議員

質問させていただく。地域の売り出し方において、今、必要なのは、その地域を売るための物語づくりであり、そのためのショルダーコピーの重要性がいわれている。地域の特徴を上手くつかんだコピーをお考えの方がいらっしゃったらお伺いしたい。

例えば豊橋の第4次総合計画では「笑顔がつなぐ緑と人のまち・豊橋」があるが、どこの都市でも当てはまるものではなく、三遠南信ならではのものがおもしろい。先ほどの武将の名前などキーワードを上手く当てはめ、みんなが納得するショルダーコピーを考える必要がある。

それは日本はもちろん、世界に通じる必要がある。そのためには、優れた企画を考える人間が必要で、そのシュルダークのコピーの下には様々な戦略と戦術がなければならない。地域の発信というのはそういったものではないかと思う。

浜松市長

現在、浜松市も、街をどうやって国内外に売り込んでいくかというシティプロモーション活動を行っている。首都圏向けの浜松の情報誌を発刊したり、私自身も営業マンとして走り回っている。一言で浜松をどう売り出すか、これは実は大変大きな悩みである。浜松は、三遠南信の各自治体と同様に、良いものを多く持っているからである。これしかないという地域であれば、それ1本で売り込むが。

私は、例えば浜松市で言えば、日本一住みやすい街だと思っている。浜松市では、浜松出身でない、転勤で各地を回った人が、終の棲家にするケースが非常に多い。それは医療体制、自然環境、インフラ、人間性、都市機能等いろいろ理由があると思うが、トータルに住みやすさを感じるところであると思う。それをどのように全国に発信していくのか、悩んでいるところである。

豊橋市議会 伊藤議員

浜松は住みやすいと思うが、「日本一住みやすい」というのはどこでも掲げたいコピーである。何か良いシュルダークコピーを考えられることを大いに期待する。

小坂井町商工会会長

三遠南信というのは、一般住民にとっては、三遠南信自動車道の建設促進が主な事業と捉えているが、三遠南信の地域活性化を図るということも大きな課題である。私どもは、年1回の小坂井町のお祭りにおいて、豊根村の特産物を販売し、交流を深めている。各地域の祭等で、各地の特産物を販売するコーナーを設け交流を深めたら良いのではないか。昨年の課題に情報の

連携、情報交換があるが、一般の住民に三遠南信の実態というものを知ってもらうために、そのような活動が望ましいのではないか。

蒲郡市副市長

シュルダークコピーは、その街の目指すべき姿を表し、市民の中に共通認識が生まれるという効果がある。

■ 重点プロジェクトの実現に向けての意見交換

コーディネーター

後半は、重点プロジェクトの実現に向けて具体的な意見交換をしたい。

これからのこの三遠南信サミットは、やはり住民の参加が非常に重要だと私は考えている。午前中の住民セッションの「技」で話し合われた中身を若干紹介いただきたい。

特定非営利活動法人佐奈川の会会長

3年前から住民セッションに係わらせていただいております。また、今年は豊橋開催ということで、企画段階から参加させていただいている。住民セッションでは、分科会と同じように4テーマに分けて、意見交換をした。

「技」のグループでは隣にいらっしゃる池田さんの提案により農業技術について取り上げた。池田さんはトマトの栽培で大臣表彰を受けた方で、農業の取り組み方、阿南町での暮らしなどについてご報告いただいた。

現在は、年に1回この三遠南信サミットで集まり、様々な分野の意見交換をしているが、それだけではなく、多くの人実際にその地に行き、その文化に触れることで、三遠南信の人々の心がつながるよう、具体的にこれから詰めていきたいという話をした。

コーディネーター

農商工連携は、別名6次産業、つまり1次、2次、3次を掛けてあるいは足して6次産業といわれるが、そういう意味で農商工連携というのは

地域連携産業だと思う。それぞれの地域をつなぐという役割が農商工連携にはあるのではないか。そのような観点から中山間地域の農商工連携を考えたかどうかと思っている。中山間地域では農商工連携に対して非常に積極的だと聞いているがどうか。

阿智村商工会会長

南信州においては根羽村商工会、平谷村商工会、私たち阿智村商工会の3商工会が広域連携をしている。事業としては、スローライフ、スローフード運動の推進に取り組んでいる。地域の食材を大切にしながら、地域の農家を活かすような商工業の存続及び発展を検討するものである。東京から有名なシェフを招き、地域の食材を使った弁当やおやきの味比べ大会を3回開催した。

昼神温泉、スキー場等を活用し、食材の販売を行っている。地域の風土にあったキクイモ、ヤーコン、ニンニク等の出荷施設が3つほど建設の運びとなっている。県境を越えた交流も盛んで、豊田市の産業フェスタや中津川市のふるさと自慢まつりに参加している。さらに交流を深める必要があると考えている。

コーディネーター

今後のこのプロジェクトをさらに実現していくため、具体的な何か提言があればお願いしたい。

袋井商工会議所会頭

静岡県では食の推進会議というものがあり、そこでは消費者団体等が地産地消を推進している。しかし、現場サイドでは様々な問題がある。曲がったニンジンや切りにくい、必要なときに必要な量のジャガイモがそろわないなど使い勝手が悪いのである。地産地消は良いことであるが、これを進めていくには現場の声に配慮していただきたい。

祭り街道の会会長

阿南町は、今年、信州アトムという会社を立ち上げ、遠鉄ストアと提携し、高原野菜を出荷している。評判が良く来年も続けていくのでご報告したい。

渥美商工会会長

渥美商工会では、農商工連携事業について大変苦労している。食の安全安心を保つための取り組みをしている。渥美半島から豊橋にかけては、気候が温暖で大変恵まれた地域であり、今後も美しい地域としてきたい。

田原市商工会会長

企業誘致に関してお話させていただく。田原市の臨海部には未利用地があり、6回ほど企業誘致説明会を行った。幸いにして、電炉メーカーが11月24日に操業する運びとなった。企業誘致については、新城市、豊川市、豊橋市と協力して行っている。

以前から別の電炉メーカーがあるため、豊橋の港には浜松や静岡で出されたスクラップが集積されている。新たに進出した企業が操業すると物流も変わってくると思う。

豊橋の港は、ベンツは撤退したが、2類港であるので料金を安く設定することができ、海外に対しても競争力がある料金で対抗できる。

松川町副町長

三遠南信地域は大変ポテンシャルが高いが、南信州は規模が小さい。しかし、小さいながらも重要な役割があるように感じている。産学官連携における南信州の特徴としては、電子、精密、光産業技術を得意としており、三河、遠州の皆様と提携し、重要な部品を提供している点である。また、農商工連携においては、果物に頼っている中、リンゴを使ったリンゴバターどら焼、山ブドウを使ったワインづくりに取り組んでいる。

袋井商工会議所会頭

産学官連携事業については、袋井市の理工科大と取り組んでおり、1年に1回発表会を行っている。その中で、キャップをひねると粉が落ちて新鮮なお茶が飲めるという商品を開発した。問題は、大学側は商品化に非常に時間をかけており、民間と感覚が違うという点である。大学側が門戸を開いて好意的に取り組んでいただいているが、それを活かすきれない状況である。

コーディネーター

最後にまとめをさせていただきたい。まずアドバイザーの中野さんからご意見をいただきたい。

アドバイザー

ただいまの産学官連携における大学と民間との感覚の違いについては、大学の中や民間にいるコーディネーターを間に入れると良いと思う。

三遠南信は街道が非常に多く、それをどのように活用するのが非常に大きなテーマである。住民の方たちに頑張ってください、人を呼び込んでいただきたい。

2ヶ月の間に様々な祭りを行い一斉に三遠南信地域を発信する。また、桜が渥美半島で咲き始めてから南信州にいくまで1ヶ月間かかることから、この地域では1ヶ月間桜が見れるということを発信する。このような生活産業がこの地域にはある。

コーディネーター

最後に皆様から意見の集約をさせていただきたい。

まず1つ目は、情報交換の重要性である。実際に集まったりインターネットを活用したりする中で情報交換、異業種交流をし、新たな発想、イノベーションが生まれる。

2点目は、情報発信である。三遠南信は、知名度は低いが様々な地域資源が眠っている。ショルダーコピーや見せ方ということを含めて情報発信の方法を詰めていく必要がある。

3点目は、産学官連携、農商工連携に関して、選択と集中をしていく現在の状況のなか、これまでの実績を基に、産学官連携の拠点をさらに三遠南信地域で上げていくことである。

4点目は、連携から融合へという時代に来ているということである。産学官連携、農商工連携を融合に高めるための具体的な取り組みが必要である。

皆様のご協力により円滑かつ内容の濃い意見交換ができたと思う。心よりお礼を申し上げる。

以上をもって「技」の分科会を閉会する。

